

バラートム

アダム・フィッシャー&ハイドン・フィルハーモニー・ファンクラブ会報

バラートムとはハンガリー語で「私の友達」という意味です

チューリッヒ、ヤナーチェク「利口な雌狐の物語」



チューリッヒオペラの「利口な雌狐の物語」より

近年フィッシャーさんはチューリッヒオペラの看板客演指揮者として活躍していますが、昨シーズンの新製作「アイダ」に続いて、今シーズンはヤナーチェクの最も有名なオペラ「利口な雌狐の物語」の新制作を担当しました。

これは小さい頃に森番に捉えられ、ペットとして育てられた雌狐の物語です。彼女はある日縄を噛み切り、ニワトリたちをかみ殺して逃げ出します。若い狐と出会った彼女は子供をもうけますが、第3幕で狩人に撃たれてしまいます。その狩人は新妻のテリンカへ雌狐の毛皮をプレゼントします。

森の中でテリンカと雌狐を失ったことを嘆く森番の前に、子供の雌狐が現れ、死が新しい生命の誕生に続く自然の循環を示します。

ヤナーチェクは新聞に連載されたコミックを元にしてこの作品を作曲しました。彼自身を森番に、若い愛人カミーラをテリンカと雌狐に投影したと言われています。

作曲家のメッセージは生命の循環ですが、たくさんの動物が出てくることから近年は子供向けオペラとして人気の高い作品です。チューリッヒ・オペラは若い聴衆のためにマチネ公演も複数企画しています。若い聴衆を意識した演出もあり、第一幕の幕間にはバレエ学校の生徒たちがハエに扮して寸劇を披露するし、第2幕の幕間ではカエル役の少年マーロン・ゲッツがコミカルな朗読をして大喝采を浴びました。

殆どの歌手はマスクを被り、タイトルロールのマルティナ・ヤンコーヴァは母国語で活発な雌狐を、中心の森番はオリバー・ヴィドマーが歌いました。歌で最も印象に残ったのは校長のペーター・シュトラカでした。終演後のカーテンコールでは、たくさんのお出演者で舞台は満杯でした。

フィッシャーさん指揮のチューリッヒ・オペラオーケストラは活発な演奏で、生き生きとした森の生命を表現しました。今回の公演は子供だけでなく、大人も楽しめる品質の高いものでした。

ハイドンターゲ2007プログラム

成功に終わった昨年のハイドンターゲに続いて、ハイドンフェストシュピールはハイドンターゲ2007のプログラムを発表しました。今年のテーマは「ハイドンとロマン派」です。古典派ハイドンの業績は大きく、ブラームスはもちろん多くのロマン派の作曲家が影響を受けています。

音楽祭は9月6日にフィッシャーさんとハイドンフィルのオラトリオ「四季」で開幕します。ソリストはジュリアネ・パンセ、マークス・シェーファー、フローリアン・ボッシュ、合唱はウイーンジグフェラインが担当します。翌日にも同じプログラムの再演があります。

今年のハイドンフィルのミサ曲は13日です。フィッシャーさんが「ハイリゲメセ」とドボルザークの「新世界より」を指揮します。

16日のマチネ2公演はハイドンの交響曲15番と97番、並びにクレメンス・ハーゲン独奏のチャイコフスキーの「ロココの主題による変奏曲」です。

その他の企画は、マーラー室内管、メゾソプラノのグレース・パンブリー・リサイタル、マッケラス指揮のハノーバーバンドなどがあります。会員チケット発売は2月20日、一般発売は3月5日です。詳しくはwww.haydnfestival.atをご覧ください

バンベルグ交響楽団客演コンサート



アダム・フィッシャーとバンベルグ交響楽団

バイエルン州立オーケストラのバンベルグ交響楽団はドイツ国内でもトップクラスの楽団で、フィッシャーさんも度々客演

しています。2006年11月にもバンベルグ響の指揮台に上がり、ハイドン、モーツァルトとドボルザークを演奏しました。

オープニングはハイドンの交響曲第103番「太鼓連打」です。ハイドンフィルの切れ味鋭いアクセントに比べると、バンベルグ響は伝統的なドイツ風です。美しい響きのどっしりとした演奏は、まるでハイドンフィルの90年代初頭のコンサートのようなものでした。

その次はモーツァルトの3つのアリア、“Chi sa, chi sa, qual sia”, „Vado, ma dove? Oh Die”, „L’amero, saro costante”です。当初予定されていたルース・ジーザクがキャンセルしたため、急遽シモーナ・サトゥローヴァが代役を務めました。

休憩の後、メインプログラムはドボルザークの交響曲7番です。戦前のプラハ・ドイツ交響楽団をルーツとするバンベルグ響が十八番とする作品ですが、フィッシャーさんの中央ヨーロッパの風味を効かせ、のびのびとした演奏の超一流のドボルザークでした。満員の聴衆は熱狂的な拍手で演奏者を讃えました。

世界のコンサートホール — リーダーハレ(シュトゥットガルト、ドイツ)



シュトゥットガルトのリーダーハレ

シュワベン地方の中心地、シュトゥットガルトは人口60万人の中都市です。オペラ座と並んでリーダーハレはこの街の文化の重要な建物です。

ロルフ・グートプロドとアドルフ・アベルにより設計させたリーダーハレは、第2次大戦中に破壊された旧コンサートホールの跡地に、1956年に建てられました。斬新なデザインの客席は、50年以上経った今でもドイツの建築史に残る作品として高く評価されています。建物内には3つのホールがあり、752席のモーツァルトザールは室内楽、1900席のヘーゲルザールはポップコンサートやバレエ公演に、2200席のベーターベンザールはシュトゥットガルトの3つのオーケストラの基地として使われています。地元の団体だけでなく、世界の有名オーケストラが毎年このホールに客演する、ドイツ国内でも有数のクラシック・コンサートホールです。

素朴な質問コーナー — 歌手が公演中に歌えなくなったらどうするの？

オペラにはトラブルが付き物ですが、もし主演歌手が公演中に歌えなくなったらどうするのでしょうか。フィッシャーさんに聞いてみました。

「公演中断を決定できる、または異常事態に対応する権利を持っている人は、ステージ・マネージャー（ドイツではInspizient）です。幕を下ろすか、ステージに出てきて説明するのは彼/彼女の仕事です。ステージ・マネージャーは全てについて責任があり、全ての情報が届く（はず）です。

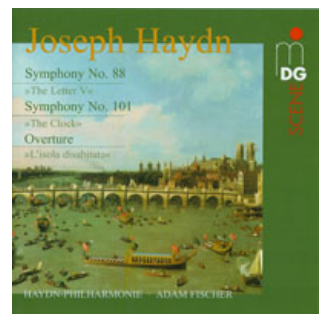
80年代ミュンヘンのカルロス・クライバー指揮「椿姫」公演で、テノールのGiacomo Aragallが、第2幕のアリア開始直後に「ごめん、これ以上続けられない」と言ってステージを去った事件がありました。クライバーはアリア全曲をテノールなしで演奏し、その後カーテンが下りてステージマネージャーが、Aragallが体調不良なので、しばらく中断する旨放送しました。（結局Aragallは残りを歌い続けました。）

チューリッヒやウイーンを含むドイツ語圏のオペラ座は、カバーと呼ばれる代役は用意しません。費用がかかりすぎるからです。全キャストのカバーと契約するニューヨークのメトでも、街にいれば良く劇場で待機する必要はありません。

私がチューリッヒでドン・カルロを指揮した時に、第4幕のアリアでBenackovaが歌えなくなったことがありました。そのときはステージ・マネージャーが出てきて、今日の公演はここで終わりとして放送しました。だから人々はフィナーレを聞くことなく家に帰りました。この時もカバーはいませんでした。私はそのときのことをハッピーエンドのドン・カルロと呼んでいます。」

CD、DVDリリース情報

前回のニュースレターで報告したように、アダム・フィッシャーとハイドンフィルの新しいCDがMDGから発売されました。これにはハイドンの3つの作品、「無人島」序曲、交響曲88番、同101番が収録されています。プロデューサーとエンジニアはエコー賞を受賞した前回と同じで、今回も素晴らしい音質です。



また、ザルツブルグ音楽祭はモーツァルト22プロジェクトとして、モーツァルトの全劇場作品のDVDを製作・発売しました。ボックスセット以外にも単体でも発売されています。フィッシャーさん指揮マンハイム国立劇場の「アルバのアスカニオ」も単独で入手可能です。

新しく制作されたものだけでなく、旧作品のDVD化もあります。ウイーン国立歌劇場1983年制作のマスカーニ「マノン」が昨年末に発売されました。これには30代半ばのフィッシャーさんがフランスオペラを振る姿が映っています。

演奏会情報 — 2006年5月～2006年8月

フィッシャーさんとハイドンフィルの出演予定です。変更する可能性もあるのでご注意ください。

07年2月 — 4日、デンマーク・ラジオ・シンフォニエッタ（コペンハーゲン）、モーツァルトとマーラー。10日、ハンガリー放送響（ブダペスト）、マーラー8番。14日、チューリッヒ・オペラ、「利口な雌狐の物語」。20日・24日、28日、ウイーン国立歌劇場、「フィガロの結婚」。

07年3月 — 3日、ハンガリー放送響（ブダペスト）、コダーイ。8日・11日・15日、ウイーン国立歌劇場、「薔薇の騎士」。18日・22日・25日・29日、ウイーン国立歌劇場、「フィデルリオ」。27日・28日、カメラータ・ザルツブルグ（ウイーン）。

07年4月 — 1日、ハンガリー放送響（ブダペスト）、「ハーリ・ヤーノシュ」。5日、ハンガリー放送響（ブダペスト）、モーツァルト「レクイエム」他。14日、デンマーク・ラジオ・シンフォニエッタ（コペンハーゲン）。18日・19日・20日・22日・23日・28日、ハイドンフィル・ツアー（ヴィルヘルムスハーフェン、ハンブルグ、ベルリン、ドルトムント、デュッセルドルフ、ブラウンシュヴァイク、アイゼンシュタット）

07年5月 — 7日・11日、バイエルン国立歌劇場、ワーグナー「さまよえるオランダ人」。19日、ウイーン国立歌劇場、ブラシド・ドミンゴ40周年記念ガラ。27日、ハイドンフィル（フェルトード）、ハイドンフィル20周年記念コンサート。28日、ハンガリー放送響（ウイーン）、コダーイ「ハーリ・ヤーノシュ」。

編集後記

ハイドンターゲ2007のスケジュールを発表した直後、アイゼンシュタットのハイドンフェストシュピレは2009年に向けて準備を始めました。200回忌の5月31日付近にはコンサートシリーズが企画されているし、ハイドンターゲも延長されて、たくさんの催しが予定されています。もちろんフィッシャーさんとハイドンフィルが主役を務めます。2009年は忙しい年になりそうです。

コンサート以外にも録音のリリースがたくさん予定されています。「マノン」に続いてウイーン国立歌劇場の「売られた花嫁」でも若き日のフィッシャーさんが見られそうです。

次回はハンブルグや首都ベルリンを含んだハイドンフィルのドイツ・ツアーのレポートなどをお伝えする予定です。